人文論叢（三重大学）第19号　2002

《訳語類解》に注記された漢語の同義・類義語について

－ 司訳院類解辞書中の漢語について（その 1）－

福　田　和　展

要旨：《訳語類解》《同文類解》《蒙語類解》は李朝時代に外交実務と通訳官養成のための外国語教育を管掌した司訳院から刊行された漢語、満州語、蒙古語辞典である。この三書はともに見出し語が漢語で立てられており、その漢語は 16 世紀末から 17 世紀前半の漢語北方方言が収録されている。本研究はこの三書の漢語について比較分析を行い、その特徴を明らかにすることによって、《訳語類解》《同文類解》《蒙語類解》の近世漢語研究資料としての価値を見出すものである。なお本稿はその前半部分として《訳語類解》の収録語彙に注記された同義語、類義語とハングルによる漢語音転写について論じたものである。

0　はじめに

李朝時代に近隣諸国語の通訳業務や通訳官養成を管轄した司訳院では主に、中国語を対象とした「漢学」、蒙古語を対象とした「蒙学」、女真語、満州語を対象とした「女真学」（清朝成立後は「清学」と改称）、日本語を対象とした「倭学」の 4 分野について数多くの教科書や辞書が編纂、刊行された[1]。この 4 言語それぞれに書名に「－類解」と名の付くの辞書がある。中－韓辞典の《訳語類解》1690 年刊金敬俊、金指南等編、中－満－韓辞典の《同文類解》1748 年玄文恒編、中－蒙－韓辞典の《蒙語類解》1768 年李億成編そして日－韓辞書の《倭語類解》刊行年不明[2]、洪舜明編の 4 書である。（本稿では以上 4 書について《訳語類解》を《訳語》、《同文類解》を《同文》、《蒙語類解》を《蒙語》、《倭語類解》を《倭語》と略記する。）この 4 書間には語彙を天文、地理、時令等の各項目に分類し、韓国語の意味を記すという体裁上の共通点がある。司訳院で刊行された外国語教科書には例えば《老乞大》のように、まず漢学で漢語教科書として刊行されてから満州語とモンゴル語に翻訳されて清学、蒙学の 2 学で会話教科書として使用されるなどの例もあり、いわゆる「－類解」4 書の場合もそれぞれの刊行年代からして漢学で使用された《訳語》の影響を大いに受けたと考えられる。しかし、清学、蒙学、倭学の類解は《訳語》を当該言語に単に機械的に翻訳したものではない。《同文》《蒙語》は項目の分類が同一であるが、《訳語》や《倭語》は項目の分類がそれぞれ独自のものになっている。また見出し語は《訳語》《同文》《蒙語》がいずれも漢語で見出し語を立てているのに対し、《倭語》は日本語の漢字語で見出し語を立てている。更に漢語による見出し語自体にも《訳語》《同文》《蒙語》の 3 書間ではそれぞれ異同がある。

本稿ではまず①《訳語》の見出し語について注記されている同義語、類義語と発音の注記について分析し、《訳語》に収録された漢語の特徴を明らかにする。②更にそれらの語彙と《同文》《蒙語》の漢語見出し語とのの比較分析を行うことによって、《訳語》《同文》《蒙語》の漢語見出し語の違いがどのような必要性の下で生じたのかを明らかにする。

1　《訳語》《同文》《蒙語》について

1.1　《訳語類解》

《訳語類解》は中－韓辞書で1682年に金敬俊、金指南等によって編纂され、1690年に刊行された。《通文館志》什物条に

康熙壬戌老峯閔相国　令院官慎以行金敬俊金指南　質問於漢人文可尚鄭先甲修正　至庚午令鄭昌周尹之興趙得賢損財刊板（康熙壬戌に老峯閔相国が司訳院の慎以行、金敬俊、金指南に命じ、漢人の文可尚、鄭先甲に質問して修正させ、庚午の年に鄭昌周、尹之興、趙得賢に命じ刊行させた。）

とある。体裁は漢字で漢語見出し語が記され、各漢字の下にはハングルで左右に2通りの漢字音が転写されている。見出し語の下には圏点が付され、その下にハングルで韓国語の意味が記されている。項目の分類は：

天文　時令　気候　地理　宮闕　官府　公式　官職　祭祀　城郭　橋梁　学校　科挙　屋宅　教閲　軍器　佃漁　館駅　倉庫　寺観　尊卑　人品　敬重　罵辱　身体　孕産　気息　動静　礼度　婚娶　喪葬　服飾　梳洗　食餌　親属　宴享　疾病　医薬　卜筮　算数　争訟　刑獄　売買（以上上巻）珍宝　蚕桑　織造　縫裁　田農　禾穀　蔬菜　器具　鞍轡　舟舡　車輛　技戯　飛禽　走獣　昆虫　水族　花草　樹木　瑣説（以上下巻）

以上の62項である。本稿では奎章閣所蔵の古図書本を1974年に韓国の亜細亜文化社が刊行した影印本を使用する。

1.2　《同文類解》

《通文館志》巻8什物続条に

同文類解板　乾隆戊辰清語訓長玄文恒修整　芸閣刊板○以上板材該学蔵（同文類解板乾隆戊辰（1748）清語訓長の玄文恒が修整す。芸閣から刊行す。○以上の刊材は清学が所蔵する。）

とあることから《同文類解》の刊行が1748年であったことがわかる。該書巻末の安命説の跋文に

清学旧有所謂物名是乃口耳郵伝一小冊也　業是者病其訛謬　而莫或正之且百年矣　本学訓長玄同枢文恒慨然有意於得清文鑑大清全書同文考彙等之書　専心用隈以正之　閲六寒暑而編成矣（清学には昔所謂物名という口伝いに伝わった本があった。清学を学ぶ者はその本の誤謬によって間違いを起こしてしまっていたが、長い間これを正さないままでいた。本学の訓長玄同枢文恒は清文鑑、大清全書、同文考彙等の書を得て、これを正し、6年の歳月を経て同文類解を編纂した。）

以上の記録からおそらくは清学辞書として古くから伝わっていた「物名」という書物を基に、満州語辞書である清文鑑、大清全書、同文考彙を参照しながら編纂されたことがわかる。該書は上下2巻からなり、漢字で漢語見出し語が記され、その下にハングルによる韓国語の意味、続いて圏点を付し、ハングルによって転写された満州語が記されている。《訳語》と異なり、漢語見出し語にはハングルによる漢語音注音は付されていない。分類される項目は以下の55項目である。

天文　時令　地理　人倫　人品　身体　容貌　気息　性情　言語　動静　人事　宮室　官職

官府　城郭　文学　武備　軍器　政事　礼度　楽器　孕産　梳洗　服飾　飲食（以上上巻）
田農　米穀　蔬菜　果品　疾病　医薬　喪葬　寺観　佃漁　器具　匠器　舟車　鞍轡　算数
珍宝　布帛　売買　争訟　刑獄　国号　戯玩　罵辱　飛禽　走獣　水族　昆虫　樹木　花草
雑語（以上下巻）

本稿では国故叢刊第9として延禧大学校東方研究所刊行の《小児論　同文類解　八歳児三訳総解》1955年の中に影印されたものを使用する。

1.3　《蒙語類解》

《通文館志》続集　什物条に

蒙語類解板　乾隆戊子蒙語訓長李億成修正本院板

とあることから、乾隆戊子（1768）年の刊行であることがわかる。鄭光1978では更に蒙学の会話教科書である《捷解蒙語》（1737年刊）の序文の

本学堂上李公億成　曾為訓長時慨然於此、毎赴燕京、蝨就蒙古館、與之論難字、演習語音、帰與有志者、屢年講磨老乞大類解等之書、校其訛謬（以下略）（本学堂上官の李公億成はかつて訓長だった時、北京に赴くたびにすぐに蒙古館に行き難しい字について論じ、発音を学んだ。帰国すると志ある者と何年も老乞大、類解等の書を学び、その誤謬を校勘した。）

この記録から上掲鄭光1978では《蒙語》には初刊本が別に存在し、これを修正したのが《蒙語》であると指摘されている。初刊本は現在未発見である。該書は上、下、補編の3巻3冊からなり、《同文》と同様漢字による漢語見出し語（ハングル注音はなし。）の以下にハングルによって韓国語の意味が記され、圏点を配し次にハングルによって蒙古語語彙が記されている。門項の分類は《同文》と配列に若干の異同があるものの、まったく同一である。

本稿では奎章閣所蔵本を1971年にソウル大学出版部が影印刊行したものを参照した。《蒙語》の版本はソウル大学奎章閣に木版本1冊と東京外国語大学図書館に奎章閣所蔵本と同一版本の手抄本が現存している。

《訳語》と《蒙語》にはそれぞれ補編が後に刊行されている。《訳語類解補》金弘編1775年刊行と《蒙語類解補》1790年刊行である。この2書はともに《訳語》《蒙語》から半世紀以上後の刊行であるが、記載される漢語部分については《訳語》《蒙語》とそれぞれの補編との間に変化がないために本稿では考察の対象とはしない。

1.4　類解辞書の朝鮮訳学での位置

高麗朝の通文館を引き継ぎ、李朝では司訳院を設置して漢学、蒙学、女真学、倭学の所謂「四学」を設置して各国語の通訳官養成や外国使臣の接待、外国への使節派遣の際に随行しての通訳業務及び漂流者への尋問と本国への送還といった、外交実務を担当した。「事大交隣」をいわば国是とした李朝の司訳院での通訳官養成事業は当時、日本や琉球で行われた通事養成が専ら中国から帰化した華人による世襲によって賄われていたのに対し、李朝では科挙によって人員を登用し、通事も官僚システムの中に組み込まれていた点が特徴的である。通訳官登用のための科挙は「訳科」「訳学」等と呼ばれ、兵学、律学、字学、医学、算学等とともに科挙中の「雑科」に分類された。「雑科」は王朝の中枢を担う文官、武官を登用する「文科」「武科」とは異なり、上記のようないわば行政の実務を担当した下級官吏を登用するシステムであった。姜信沆1978では李朝の通訳を2つに分類している。

第１類：大体訳科出身または取才のような特別登用で仕官の道についた者で、常に賤視や賤待を受けた。[3]

第２類：漢学講肄官[4]、または質正官[5]出身の多くは文科出身者で、講肄官や質正官でなくとも両班階級に属していた者。

上記第１類の訳官は以下の表に記された試験に及第するか、いわば技術者の現地採用試験に該当する「取才」によって任用された者たちであるが、姜信沆1978では「科挙に合格した者のうち、一等合格者は従七品、二等は従八品、三等は従９品に叙せられたが、「於本衙門叙用」と制限されていた。（中略）このようにして登用された訳官たちは司訳院の官吏、または地方訳学[6]の訓導等として活躍したが、主な任務は通事の任務であった。一般的に通事にもいくつかの種類があった。実力によって三等に分かれ、上等は通事の任務に、中等は押物、押馬に、下等は打角夫として（外国へ）派遣された。」とし、李朝の官制の中でも最下層の身分であった。

雑科の試験科目及び出題書の変遷について林東錫1982では、以下のようにまとめている。

法典 四学	≪経国大典≫ （1485）	≪通文館志≫ （1720）	続　大　典 （1746）	六　典　条　例 （1876）
漢学	（臨文）[7] 四書 （背講） 老乞大、朴通事、直解小学 （臨講） 翻経国大典	（背講）[8] 老乞大、朴通事、伍倫全備 （臨講） 論語、孟子、中庸、大学、翻経国大典	（背講） 老乞大、朴通事、伍倫全備（後に訳語類解） （臨講）[9] 四書、二経	（背講） 老乞大、朴通事、訳語類解 （臨文） 四書、翻大典会通
蒙学	（写字）[10] 王可汗、守成事鑑、御史箋、高難加屯、皇都大訓 （臨講） 老乞大、孔夫子、帖月真、吐高安、伯顔波豆、待漏院記、貞観政要、速八實、章記、何幸厚羅、巨里羅 （臨訳） 翻経国大典	（写字） 守成事鑑、御史箋、孔夫子、伯顔波豆、待漏院記 （背講） 新翻老乞大 （翻語） 翻経国大典	（写字） 捷解蒙語、蒙語老乞大 （翻答） 文語	（写字） 捷解蒙語、蒙語老乞大 （臨文） 翻経国大典
女真学・清学	女真学 （写字） 千字、天兵書、小児論、三歳児、八歳児、児待衛、去化、七歳児、仇難、十二諸国、貴愁、呉子、孫子、大公、尚書 （臨講） 翻経国大典	清学 （写字） 八歳児、三訳総解、清語老乞大 （臨文） 文語	清学 （写字） 八歳児、三訳総解、清語老乞大 （臨文） 文語	清学 （写字） 八歳児、小児論、三訳総解、清語老乞大 （臨文） 翻大典通解

以上の表中には《蒙語》《同文》の書名がないが、姜信沆1978では出題書交代の時期は明記

しないものの、蒙学の「写字」の出題書について注を付け、「後に老乞大・捷解蒙語にすべての本が代置され、その中に蒙語類解が追加された」としている。以上は定期的に行われた雑科科挙の試験科目と出題書名の一覧であるが、この他に上掲林東錫 1982 では国家に慶事があったときに臨時に行われた科挙の「増廣試」や司訳院内での奨学試験及び昇任試験の出題書目に《訳語》の書名をあげている。以上から《訳語》《蒙語》の 2 書は通訳官登用や通訳官任用後に行われた各種の試験での出題書とされたほか、《同文》のように出題書としては記録にないものでも、通訳官が当該言語を学ぶ際には辞書として使用されたものと思われる。

2　《訳語》の同義語について

《訳語》は見出し語が約 4800 語に上るが、そのうち 618 語の見出し語は朝鮮語訳部分に「上仝」と注記されており、直前の語と同義かもしくは類義の関係にある語である。筆者は以前、拙論「《訳語類解》に「上仝」と記された語彙について」の中で、この見出し語の下の朝鮮語訳の部分に「上仝」と注記されている語彙について考察し、これらの語が漢語北方方言語彙を中心に記録されたものであると分析した。《訳語》にはこの他にも朝鮮語訳に続けて「一云…」「或云…」「或云…」「一作…」等として更に同義もしくは類義関係にある漢語語彙を示している例があり、またやはり見出し語下の朝鮮訳に続いて「或呼…」「俗呼…」として以下にハングルで見出し語中の 1 漢字について別の漢語音を注記している例が多数認められる。この章ではこれらの《訳語》中に見える同義、類義の関係にある語と注記された発音転写についてその性質を考察する。

2.1　ハングルで転写された発音について

1443 年に「訓民正音」すなわちハングルが制定されると、司訳院の四学で編纂、刊行される外国語教科書にもハングルを使用して、当該言語の発音が転写されるようになった。本来朝鮮語表記のために考案されたハングルの文字システムでは外国語音を正確に表記することはできなかったが、一方で李朝では明の洪武年間に刊行された官選韻書の《洪武正音》の音韻体系をハングルで転写した《洪武正音訳訓》（1445）の編纂事業を通じて、漢字の中国語音をハングルで転写する方法をも確立していた。しかし、これはあくまで韻書の音韻体系を機械的にハングルに置き換えるやり方であったため、実際の中国語音とは幾分かけ離れたものにならざるを得なかった。漢学教科書の漢語音転写の体系を整えたのは訳科出身の訳官であった崔世珍（1467～1542）である。崔世珍は《四声通解》[11]と漢語会話教科書の《翻訳老乞大》《翻訳朴通事》[12]編纂において、漢字 1 字の下に《洪武正音訳訓》の発音転写（正音）を、右に当時の中国で実際に発音されている音（俗音または近俗音）を転写するというスタイルを確立した。《訳語》も漢語見出し語の漢字 1 字ごとの下部に 2 通りのハングルによる漢字音が記されている。鄭光 1978 ではこの 2 通りの漢字音について考察している。それによれば、《訳語》の発音転写は左に《洪武正音訳訓》の発音転写を忠実に表記しているが、右側のハングル転写音では声母の転写と音節末尾の「△」の表記に若干の違いがあるものの、基本的に崔世珍が《四声通解》《翻訳老乞大》《翻訳朴通事》で確立した転写方法を踏襲しているとしている。つまり、《訳語》の漢字音注音では左側のハングル転写音は韻書に基づいた理論的再構音で、右側のハングル転写音はより《訳語》当時の中国語の実際の発音に近い音が反映されたものである。崔

世珍のハングル転写と《訳語》の右音に多少の変化が認められるのも、この結果であると考えられる。

2.2　注記された発音転写について

《訳語》では更に朝鮮語訳に続けて圏点を配し、「俗呼」「或呼」「或作」「俗音」「方音」「南音」等の下に表題語の漢字についてハングルで別に漢字音を注記している。このような例は重複分も併せて64語認められる。なお本稿ではこの漢語転写音を「注記音」と呼ぶこととする。以下具体例を考察する。

2.2.1　「俗呼」「或呼」「或作」「俗音」と注記された発音転写

a 韻母の変化が見られるもの

① 尼姑○尼俗呼미（上「寺観門」53－1[13]）
② 退泥○泥或呼미（下「瑣説門」235－2）
③ 和泥○泥或作미（上「屋宅」38－7）
④ 泥鏝○泥俗呼미（上「器具」176－6）

「尼」「泥」ともに漢字下の注音では左音右音ともにㅣ〔ni〕であるが、以上のように圏点以下に「泥、尼」について「俗に미という。」「俗に미とする。」との注記がある。미は〔mi〕[14] である。この2字はともに中古音では「尼母」に属する字で、現代漢語音と韓国語漢字音でも発音はやはり〔ni〕である。《漢語方音字彙》1989では「泥」を唯一安徽省合肥方言として〔ml〕としているが、「尼」については頭子音〔m〕が脱落した〔l〕音と記録している。また同書では「泥」について福建省建甌方言の項に白話音として〔mi〕と記録している。

⑤ 盤量○盤或呼판（上「倉庫」50－2）
⑥ 盤緪○盤或呼판（下「瑣説」237－9）
⑦ 盤子○盤俗音판（下「器具」167－9）
⑧ 鬋頭○鬋或呼판（上「梳洗」96－6）
⑨ 土蟠蛇、蟠近俗音판（下「昆虫」214－2）
⑩ 涅槃○槃俗呼반（上「寺観」53－5）
⑪ 鐵鏝○鏝俗呼만（下「器具176－6」）

以上⑤～⑩については左音は뻔〔bbɔn〕、右音が펀〔p'ɔn〕と転写されている。左音のㅃは漢字音転写の場合、中古音の全濁両唇音の「並母」に当てられた字で、右音のㅍは中古音の次濁両唇音「滂母」を示す。《訳語》編纂当時の中国北方音では全濁声母は完全に消滅しているので、右音の声母字の変化は《訳語》当時の実際の中国語の発音を反映したものと理解できるのだが、問題は注記部分では韻母ㅓ〔ɔ〕がㅏ〔a〕に変化していることである。現代漢語の標準音ではこれらの字はすべて〔pan〕であるから、より注記音が現代標準音には近い音値である。《漢語方音字彙》の北京の項では「按」の発音に口語音として〔ɔn〕とあり、〔an〕と〔ɔn〕を併記している。

⑫ 剥衣裳－剥或呼보（上「服飾」94－9）
⑬ 剥菱角○剥或呼보（上「食餌」113－3）

剥の左音が밟、右音が보である。밟の終声字ㅂは北方官話では当時すでに入声の音節末子音－

p－t－k は消失していたが、その字が入声字であることを明確にするために代入したもので、《洪武正音訳訓》で使用された転写方式である。実際の音値はなかったと考えられる。右音の밧は〔bau〕である。現代漢語の北京音では剥を文言音では（bao)、白話音では（bo）と発音することから、《訳語》の剥に対する注記音は北京方言の白話音を、右音では文言音を表わしたものである。

⑭　請客○客俗呼커（上「宴亨」118－7)

客の左音は쾅、右音は커〔k'iɔ〕である。注記音は〔k'ɔ〕である。現代語北京音では白話音が（qia）文言音が（ke）で、右音の커〔k'iɔ〕は北京音で尖団の区別がなくなる以前の音を転写したものと考えれば、右音は北京語白話音の（qia）に相当するものである。

⑮　琥珀○珀俗音페（上「珍宝」144－1)

⑯　把脉○脉俗音메（上「医薬」128－3)

珀の左音は퐝、右音は페。左音の転写はやはり中古音の入声字を転写するために形式的に《洪武正音訳訓》で使用された転写法である。現代漢語標準音ではそれぞれ脉（mai）珀（po）と読まれる。脉は書面語で“脈脈”「ものを言わずに目またはそぶりで意思を伝える」といった語では〔mo〕と発音される。これについても右音が文言音を、注記音が白話音を転写したものと考えられる。

⑰　卵毛○卵或呼란（上「身体」72－1)

卵は左音右音ともに뢴、である。注記音は〔lan〕。現代漢語標準音では（luǎn）であるが、《漢語方音字彙》では北京の口語音として〔lan〕と記録している。

⑱　脚子○脚或呼갸（上「身体」73－2)

脚の左音は걍、右音は교〔kio〕である。やはり《漢語方音字彙》に北京の項目には文言音として〔tɕie〕、白話音として〔tɕiau〕とある。ハングル転写で声母が「ㄱ」〔k〕となっているのは尖団音の区別が消失する以前の音を記録しているためである。

⑲　耳輪○俗呼륜（上「身体」67－4)

輪の左音右音はともに륜〔lyun〕注記音は〔lɔn〕である。《漢語方音字彙》では太原の項に〔luŋ〕と解放以前の発音として〔lyuŋ〕、また西安の項には〔luẽ〕とやはり解放以前の音として〔lỹ〕が記録されている。太原は〔ŋ〕韻尾に、西安は鼻韻尾が消失し尾母音化しているが、両地点とも〔y〕介音が解放以前の音として記録されている。

⑳　阿嫂○阿或呼오（上「親族」117－2)

阿の左音は하、右音は아〔a〕、注記音は〔o〕である。《漢語方音字彙》では北京では文言音として〔ɤ〕武漢、成都その他南方の広範囲で〔o〕と記録されている。

㉑　盪血来○血俗音혀（上「孕産」75－3)

血の左音は휭右音は훠〔hyuɔ〕。血は現代漢語でも多音節語の中では（xue)、単独で1語として使用される時には（xie）と発音される。《訳語》の右音は（xue）に、注記音は（xie）にあたる。

㉒　焼紙○紙或呼칭（上「寺観」52－9)

㉓　紙窩子○紙或音칭（上「屋宅」39－4)

紙の左音즁、右音はㅈである。注記音の音節末にある「△」は本来は声母字で中古音の「日母」〔ɹ〕の転写に使用されたが、李得春2001では「ᆞ」のように音節末に置かれた場合には、子音字ではなく、母音「ㅣ」〔i〕が舌尖後母音を表す補助的な符号として使用されているもの

だとしている。舌尖後母音は現代漢語標準音の巻舌音 zhi, chi, shi, ri の（i）の音である。つまり「ᄎᆡ」は巻舌音の（zhi）音を転写していることになる。

㉔　肺子○肺俗呼ᄇᆡ（上「身体」71－8）

肺の左音右音はともにᄇᆡ〔fi〕。注記音は〔fəi〕である。現代漢語では（fei）が標準音である。《漢語方音字彙》では西安、蘇州、梅県の方言地点に〔fi〕が記録されていて、更に同書では西安で、〔fei〕は解放後新たに発生した発音としている（これは恐らく普通話の影響であると考えられる）。また《山東省志・方言志》1995 に、「西南区の西渮、南兖、一帯では唇歯摩擦無声音声母の f は斉歯呼韻母の i と結合できる。例えば“飛”“肥”“匪”“肺”は fi と読む。」とあり、山東方言の一部地域でも「肺」を〔fi〕と発音する。《訳語》の収録語では“飛”“肥”はすべて右音にᄇᆡ〔fəi〕と転写されていて、「肺」のみ右音にᄇᆡ〔fi〕と転写されている。

b　声母に変化が認められるもの

㉕　氣嗓○氣俗呼ᄎᆡ（上「身体」69－8）

㉖　香氣花○氣或呼ᄎᆡ（下「花草」220－1）

㉗　鉅子○或呼ᄌᆞ（下「器具」176－5）

氣はともに左音右音がᄏᆡ〔k'i〕、注記音がᄎᆡ〔tɕ'i〕。鉅は左音右音がᄀᆞ〔kyu〕、注記音がᄌᆞ〔tɕy〕である。注記音はどちらも舌根音の口蓋化、言い換えれば尖団の区別の消失を転写している。漢語官話方言において中古音の見系声母〔k, k', h〕と精系声母〔ts, ts', s〕の細音が口蓋化し現代漢語標準音の〔tɕ, tɕ', ɕ〕に変化するのは現代漢語の形成の上で重要な現象である。この現象が韻書に反映され記録されるのは清代の《団音正考》（1743）であるが、口蓋化の開始時期については定説がない。金基石氏は「尖団音問題と朝鮮文献的対音」2001 のなかで、司訳院漢学教科書や李朝時代に編纂された韻書の中で最初に口蓋化現象を記録したのは 1765 年刊行の《朴通事新釈諺解》の右音であると指摘し、「16～17 世紀の中国の韻書と朝鮮文献中には口蓋化の記録はなく、当時少なくとも北方方言では尖団音の合流化現象は出現していなかったと言える。」と結論している。《訳語》では 3 例のみので、この 3 例以外の見系声母や《訳語》中のすべての「氣」に口蓋化音が注記されてはいないが、《訳語》におけるこの 3 例の注記音は中国、朝鮮の音韻資料を含めて見系声母の口蓋化、すなわち尖団音合流を記録した最初の資料となる。

㉘　鳥子○鳥俗呼ᄃᆞᆫ（上「身体」72－4）

鳥の左音はᄂᆞᆷ、左音はᄂᆞᆫ〔niao〕。注記音は〔tiao〕である。《漢語方音字彙》では北京の項に文言音〔niau〕白話音〔diau〕とある。「鳥子」は「男性生殖器」のことだが、一般に「吊」〔diào〕と作り男性生殖器の罵言である。

㉙　草蜌○蜌俗音ᄑᆡ（下「昆虫」213－8）

蜌の左音右音ともにᄇᆡ〔pi〕、注記音は〔p'i〕と声母が有気音になっている。《漢語方音字彙》では「比」の字音について北京の項で口語音として有気音の〔p'i〕をあげている。この蜌についても同様の異読音が反映されたものと考えられる。

㉚　蝴蝶兒○蝶或呼ᄐᆡᆫ（下「昆虫」210－1）

蝶の右音はᄐᆡᆫ〔tiə〕、注記音は〔t'iə〕で、これも注記音では声母が有気音になっている。《漢語方音字彙》ではやはり北京の項に、〔tie〕と〔t'ie〕の 2 通りの発音が記録されている。

㉛　酒酵○酵或呼ᄒᆞᆭ（上「食餌」100－5）

酵の左音はᄀᆞᆭ、右音はᄀᆞᆫ〔kiao〕、注記音は〔hiao〕である。《漢語方音字彙》では西安、

太原などで文言音〔ɕiau〕白話音〔tɕiau〕とある。右音の쟈と注記音챠は当時の北方方言の文白異読を反映したものである。

C「方音」「南音」と注記されているもの

㉜　葵花○葵方音或갸（下「花草」219－6）

葵の右音は뀌〔kyui〕、注記音は〔kau〕。

㉝　菊花○菊方音或귀（下「花草」219－7）

菊は右音が뀨〔kyu〕、注記音が〔kui〕。

㉜㉝の右音と注記音の関係については不明であるが、その注記の通り方言音を反映したものであろう。

㉞　知他○知南音즈（下「瑣説」237－5）

知の左音は치、右音は지。上掲李得春2001では 終声の「△」によって母音「ー」が舌尖前母音であることを示している。つまり「즈」は現代漢語標準語の（zi）音に近い音を転写していることになる。現代漢語でも、普通話の標準音では巻舌音（zhi）で発音される「知」を南方方言では一般に（zi）と発音することは広く知られている。「南音」とは広義での南方の発音を指していると考えられる。

以上、《訳語》に注記された漢字音転写は多くが文白異読の差や一部方言音を表記したものであることがわかった。これらの転写音が見出し語下の右音ではなく、注記に回されたのは恐らくは広く通用しない、俗音や訛臭のある音であるけれども、実際に訳官が耳にする発音で実用上必要であるとの判断によったためであろう。しかし、当時の中国、朝鮮の音韻学が保守性を重んじるあまり、「正統」ではないとして記録に留めなかった見系声母の口蓋化等の音韻現象を記録したのは、《訳語》が実用を旨とする通訳官養成のための教科書であったが故の当然の結果であったと言える。

2. 3　注記された同義語、類義語について

本章の冒頭でも記したとおり、《訳語》には見出し語以下の朝鮮語訳に続いて圏点を配し、以下に「一云…」「一作…」「或云…」等と注記して、見出し語に対する同義或いは類義の関係にある語や連語を注記している例が約165語認められる。ここではその中の一部について考察する。以下では「」内に見出し語（ハングル転写音は示さない。）○以下が見出し語の解釈（中期朝鮮語で意味を表記している場合には筆者が日本語に訳したものを示した。）2つめの圏点以下が注記されている事項である。

①　「寒家」○謙称自家之辞○呉蘇之人曰儂ᄂᆞ（下「瑣説」236－1）

②　寒居○上仝○山東人曰洒家（下「瑣説」236－1）

「寒家」は本来、自分の家を謙遜して言う言葉で「拙宅」の意味であるがここでは「自分を謙称する辞」と解釈されている。①に注記の「儂ᄂᆞ」のハングル転写の音値はᄂᆞ〔nuŋ〕である。現代呉語では「儂」は2人称代名詞として多く使用されるが、本来は1人称である。②に注記の「洒家」について香坂順一1983では、水滸伝からの用例を中心に考察し、「洒家」が陝西、甘粛己摩地方の方言であるとしている。《漢語方言大辞典》では「官話」として、広く北方方言で用いられている語としている。

③　臭椿樹○シンジュ、庭漆（下「樹木」226－4）

④　虎目樹○上仝○江東人曰ー ー ー（下「樹木」226－5）

⑤　山椿○上仝○北方人呼曰― ―（下「樹木」226－5）

この3つは同義の関系にあるが、⑤の「山椿」は《漢語方言大辞典》では「樗又名臭椿、其叶可养蚕。古北方方言」（樗またの名を臭椿という。その葉は養蚕に用いる。古北方方言。）とし、清の張慎儀の《方言別録》では宋の蘇頌の《本草図経》から引用した「樗、气臭、北人呼曰～」（樗、臭いは臭く、北方人は～という）の解釈を引いている。④の「虎目樹」については確認できなかったが、《訳語》の注記に従えば、江東つまり南京以東の長江南岸地域の方言であることになる。

⑥　獾子○アナグマ（下「走獣」208－5）

⑦　土猪○上仝○南話睡쉬貉학（下「走獣」208－6）

「土猪」は《漢語方言大辞典》では西南官話としている。睡쉬貉학は〔suihao〕。「南話」と注記されているが、具体的な方言地点は不明である。

⑧　下誘子○釣り餌（上「田漁」47－1）

⑨　甜食○上仝○南話餌놀（上「田漁」47－1）

「下誘子」は現代語では鰧子（yǒuzi）「動物等を捕るためのおとり」。「誘餌」（yǒu'ěr）とも。「下誘子」は動賓構造のフレーズであるが、朝鮮語訳は낙시밥で「釣り餌」となっている。⑨の「甜食」は現代語では「甘い食品」で方言でも「餌」の意味での用例を確認できない。⑨に注記されている「餌」は「餌子」で「魚の餌」という意味である。

⑩　頭口○六蓄之総称― ―関内之話（下「瑣説」237－7）

⑪　牲口○上仝関東之話（下「瑣説」237－7）

「関内」とは山海関の内側（西側）、「関東」とは山海関の外側（東側）のことである。「頭口」は《漢語方言大辞典》では河北方言、中原官話となっている。また《普通話基礎方言基本語彙集》では石家庄（河北）、利津（山東）、宝鶏（陝西）、柳州（広西）等に分布している。現代語では「牲口」が広範囲に分布しているが、《訳語》では「頭口」を「六蓄之総称」としていることから、《訳語》当時では「頭口」の方が使用範囲が広かったとも考えられる。[15]

⑫　知道○知る○一云曉학得더（上「気息」78－6）

「曉得」は現代南方方言でも「知道」の同義語として広く使用されている語である。《訳語》でも南方方言を記録したものと思われる。

⑬　磉石○支柱石○或呼柱쥬頂딩石시（上「屋宅」35－8）

⑭　磉墩○上仝（上「屋宅」35－9）

⑭の「磉墩」は⑬「磉石」の次に見出し語として立てられた同義語である。《漢語方言大辞典》では湖南、湖北、四川などの西南官話であるとし、また呉方言ともしている。⑬に注記されている柱頂石はやはり《漢語方言大辞典》で河北、山西方言としている。

⑮　白殕○カビが生える○一云長쟝白버毛맛（上「食餌」108－7）

「長白毛」は現代語では「長白毛兒」（zhǎng báimáor）でカビが生えるである。「長」は（zhǎng）と読み「育つ」の意味だが、《訳語》では쟝〔ts' aŋ〕と「長い」を意味する発音の転写が行われている。「白殕」は《漢語方言大辞典》で「食物の表面に育つ白いカビ」とあって、呉語、浙江方言であるとしている。

⑯　一折○人差し指と親指を広げた長さ○一云一이虎후口쿠（下「算数」130－3）

「虎口」も「親指と人差し指の間」を意味する。《利津方言志》1990には数詞量詞の項に「一虎口－伸開拇、食指間的長度」（親指、人差し指の間を伸ばす長さ）とある。山東他、広く

北方語の語彙である。

⑰　鵂鶹○フクロウ○或云狼혼呼후（下「飛禽」196－4）

「狼呼」は《漢語方言大辞典》では「恨乎」「恨虎」「恨鵂」と作り、北方方言としている。現代普通話では「猫頭鷹」（māotóuyīng）である。《訳語》では収められていない。

⑱　蝙蝠○コウモリ○或云벼부（下「飛禽」196－9）

注記の벼부はハングル転写音のみが記されていて、漢字が書かれていない。音値は〔piefu〕である。《普通話基礎方言基本語彙》では「蝙蝠」を〔piəfu〕と発音するとして、丹東、錦州（遼寧）、赤峰(遼寧)に、また〔piefɔ〕として揚州（浙江）を挙げている。

⑲　蓖麻○トウゴマ○一云大麻（下「花草」223－4）

「蓖麻」はひまし油の原料になる植物、もしくはその種子である。《普通話基礎方言基本語彙》では河北、山東の一部で「大麻」を記録ている。また一般的な中日辞典では「大麻」を「蓖麻」の俗称としている。

⑳　鎖鬚○ばね錠のバネ○一云鎖소簧황子ㅈ（上「城郭」29－9）

「鎖鬚」は現代語では「鎖須」と作り「バネ式錠のバネ」を意味し、「鎖簧」と同義語である。《漢語方言大辞典》では「鎖鬚」「鎖簧」ともに「旧時では長い形の銅製の錠前の中のバネ」とし、呉語であるとしている。

㉑　臉○顔○一云臉련鳴단（上「身体」68－2）

「臉鳴」転写音は〔liəntan〕。《普通話基礎方言基本語彙》では瀋陽の項に「臉(蛋兒)lian(danr)」とある。《漢語方言大辞典》にも「臉蛋兒－中原官話」とあるが、これは「頬」の意味となっている。

㉒　偷看○盗み見る○一云張장看칸（上「動静」80－5）

《漢語方言大辞典》では「張看－張望。呉語」としている。張看は「覗く」である。

㉓　廣○ありふれている。いたるところにたくさんある○或云廣광多도（上「売買」139－8）

廣の《訳語》の解釈は혼ᄒᆞ다である。《17世紀国語辞典》によれば혼ᄒᆞ다は現代韓国語で「혼하다」で「ありふれている。いたるところにたくさんある。」と解釈されている。梁伍鎮1998では《老乞大》《朴通事》の前期改訂本[16]の中に「多い」の意味で使用されている「廣」の用例を挙げている。上掲書では更に元曲からの用例を挙げており、近世漢語では広く北方方言で使用された語のようである。《元語言詞典》でも「廣」を「多い」と解釈している。崔世珍が著した《老乞大》《朴通事》の注釈書《老乞大朴通事集覧》にも「廣」を「多い」と解釈している。《漢語方言大辞典》では中原官話として「多い」を意味する「廣」が見える。注記されている「廣多」については方言などでの用例を確認できないが、「廣」の後に「多」を付加して「多い」の意味の合成語を構成している点、《訳語》当時には「多」をつけて意味を補うようになっていたことを反映していると思われる。

㉔　舀湯○スープをすくう○一云歪왜湯탕（上「宴亨」121－3）

「舀」（yǎo）は「すくって飲む」ことである。注記の歪湯〔uait' aŋ〕は《普通話基礎方言基本語彙》では錦州（遼寧）の項に「崴湯」〔uait' aŋ〕とある。

㉕　舀飯○ご飯をすくう○上仝（上「食餌」99－5）

㉖　歪飯○上仝○一云端뒨飯반（上「食餌」99－6）

㉕㉖も㉔と同様、「歪」は錦州（遼寧）の「崴」に当る。㉖注記の端飯は「ご飯を出す、運ぶ（両手で持って）」である。類義の関係である。この他《訳語》には「舀水○水をすくって

飲む」「歪水○上仝」（上「食餌」98－7）の2語が同義語として記載されている。

㉗　東塊子○東○一云東巴剌（下「瑣説」244－10）

㉘　西塊子○西○一云西巴剌（下「瑣説」245－1）

「塊子」は指示詞や方向を示す語の後について場所を示す方位詞である。《漢語方言大辞典》では江淮官話としている。《普通話基礎方言基本語彙》でも連雲港、揚州、南京等の方言地点に見える。普通話では「～邊」「～頭」が常用される。「塊兒」とアル化韻尾になると《漢語方言大辞典》では東北官話としている。注記の「～巴剌」であるが、この語は《同文》と《蒙語》にも漢語見出し語として記載されている。しかも《同文》《蒙語》では、

東巴剌－東、西巴剌－西、南巴剌－南、北巴剌－北（以上は《同文》「地理」19－4～6まで。《蒙語》「地理」16－5～6まで）また、傍巴剌－わき（《同文》「地理」20－6)、上巴剌－上側、下巴剌－下側（《同文》「地理」20－9、この2語は《蒙語》にはない。）と《訳語》の2例よりも多く収録されていて、「～巴剌」が「～邊」や「～頭」のようにかなりの造語力を持っていることがわかる。小沢重男1961では《蒙語》の漢語見出し語に記載されたこの「～巴剌」について、「不明」としている。この「～巴剌」は「東」「西」を意味する「東塊子」「西塊子」と同義関係にある方位詞であると考えられる。《普通話基礎方言基本語彙》では「這邊」「那邊」の項で赤峰（遼寧）の個所に「這邊兒拉」〔tʂɤparla〕「那邊兒拉」〔naparla〕とある。また、《漢語方言大辞典》では「邊兒拉」を東北官話〔piarla〕として「傍」と解釈している。同書ではまた山東、遼寧方言として「下」の意味で「下般兒」〔ɕiapɐr〕「下般兒」〔ɕiap ɛ r〕とある。陳康《北京方言詞典》では「邊兒」(-bianla)とある。《訳語》《同文》《蒙語》に記載された、「～巴剌[17]」もその音値などからして以上に示した北方方言のより「土語的」な語彙を収録したものと考えられる。

《同文》《蒙語》では見出し語の朝鮮語訳部分に「上仝」と注記して直前の語の同義或いは類義の語を記載したり、朝鮮語訳以下に圏点を配し、「一云…」のような形で同義、類義の関係にある語を記載するといった体裁は取らないが、《訳語》が「～巴剌」を注記に回し、収録数も「東巴剌」「西巴剌」の2語としているのに対し、《同文》《蒙語》2書では「～巴剌」と同義関係にある「～邊」「～頭」とともに見出し語として立てている点に注目したい。

北方方言の中でもより広範囲に使用される「官話的」な語彙とは言えない「～巴剌」が蒙学、清学の辞書である《蒙語》と《同文》に見出し語として立てられていて、しかも「～巴剌」で構成される連語が《訳語》より多く収録されているのは、やはり通訳業務や国境警備、越境者の尋問や送還といった実務上での必要があったからで、この点から、漢学と清、蒙両学が実務上で必要とした漢語の「質」の違いが見えてくる。朝鮮半島に隣接する中国東北地区は現在でも満州族やモンゴル族が漢族とともに雑居する地帯であり、李朝にとってここは北京への朝貢ルートであり、且つ大陸での情勢の変化がダイレクトに伝わってくる外交、国防上の要地であったことは言うまでもない。このことから《訳語》《同文》《蒙語》三書には全体的に広く北方官話系の語彙が収録されたのであるが、特に清学、蒙学においては、清朝統治の安定化が進行して行くのと同時に中国東北地区の南部[18]に住む満州人やモンゴル人の言語の上での漢化が進んでいった16世紀末から17世紀前半の時期は、漢語とりわけ中朝国境地帯から河北、北京間の漢語方言の重要性が増して来たと考えられ、その結果、「類解」三書間で語彙選択の異同が生じたものと考えられる。この点については「類解」三書の漢語見出し語について、より豊富な例を挙げて検討しなくてはならない。以下において《訳語》の同義、類義語についてのこれ

までの考察を基に、《訳語》《同文》《蒙語》の漢語見出し語の特徴について比較、検討するのだが、紙幅の都合で稿を改めることとする。

3　小結

本稿では李朝時代に司訳院から編纂、刊行された「類解」辞書に収録された漢語見出し語について、その中の同義・類義関係にある語を中心に分析し、《訳語》《同文》《蒙語》それぞれに収録された漢語の「違い」がどのような必要性の下で生じたのかを明らかにすることによって、李朝司訳院の訳学が対象とした漢語の特徴を明確にする目的で、まず四学の中で最も重要視され、他の3学にも影響が大きかった漢学の辞書である《同文類解》に注記されている同義・類義語を考察し、《訳語》の収録語彙の特徴の一端を明らかにした。

これまでの考察の結果、ハングルによる注記音は①漢字の文白異読や口語音などの「異読」を反映しているもの、②北方方言内のより広い地域の方言音を反映しているもの、③更には安徽、江淮官話といった「下江官話音」が注記されている例、そして④官話系方言ではない所謂南方系の呉方言音も注記されていたことが明らかとなった。

また注記された語彙では北方方言内（東北、河北、山東、山西等）のより広範な語彙を収録するのと同時にその中でも中朝国境に近い東北官話などでは「～巴剌」のようにかなり通用範囲が狭い語彙までも収録している。その一方で下江官話や呉語といった南方系の方言語彙も注記されている。

李朝では北京への朝貢ルートは王都漢城から北上し、遼東、瀋陽を経由して陸路北京に入城するというコースを定めていた。この点からすると通過地点である東北、河北などの北方方言や目的地である北京方言がより詳細に記録されるのは当然であるが、《訳語》に南方方言の音や語彙が注記されてるのはなぜであろうか。この理由として2つのことが考えられる。一つは漢語通訳官の任務には漂流民への尋問や本国への送還手続きがあり、船舶の遭難によって相当数の南方系中国人が朝鮮半島に漂着していたことは中朝双方の歴史書に多くの記録が残されていることからも明白である。このような海からの漂流民に対応する必要上、南方方言音や語彙を収録する必要があった。2点めは《訳語》の編纂に関わった、文可尚、鄭先甲の2名の漢人である。《朝鮮王朝実録》巻6粛宗3年（1677）丁巳3月条に

> 以流寓漢人文可尚、鄭善甲等善華語　請付軍職給料　買家以居之。令譯官輩就學。（さすらい巡って他郷に住む漢人文可尚、鄭善甲等は華語が上手なので、軍職に就けて俸給を与え、家を買ってここに住まわせ、訳官の輩に（漢語を）学ばせることを請う）

更に《通文館志》巻8故事条には文可尚についてのやや詳細な記録がある。

> 鶴鳴聞見録曰文可尚宋相国信公之十六代孫、父栄光蓋州刺使、居杭州揚子江邊乙亥漂泊於殷栗、遭丙子之乱、居恩津（以下略）（《鶴鳴聞見録》に曰く、文可尚は宋の相国信公の16代の子孫である。父の栄光は蓋州の刺使であった。杭州の長江の近くに住んでいたが、乙亥（1635年）殷栗で丙子之乱（1636）に遭い、恩津に住んだ。）

最初に示した《朝鮮王朝実録》の記事にはこの年、2人は軍職として官職につき、訳官に漢語を教えたとある。その後1682年に設置された偶語庁（司訳院内に設置された教育機関）の訓長を務める。1682年は折りしも彼等が編纂に関与した《訳語》が編纂された年である。《通文館志》の記録では文可尚について、杭州の人であるとしている。丙子之乱つまり1636

年に清が李朝に侵攻した「丙子胡乱」の時に、寓居していた殷栗（現在の黄海南道の都市）から恩津（現在の忠清南道論山附近）に恐らくは兵乱を避けて移り住んだのであろう。ともあれ《訳語》の編纂者でインフォーマント役を務めた文可尚が杭州の出身であったことと《訳語》中に南方官話や呉語の音声や語彙が散見されることは大いに関係があると考えられる。

今回取り上げた注記による漢語音転写や同義語、類義語は考察の結果、当時においては方言性や俗語性の濃厚な、もしくは公に認知され難いと考えられていた発音や語であり、それゆえ見出し語ではなく注記という一歩下がった形で《訳語》に挿入されたものである。しかし、外交実務に携わる通訳官養成のために編纂された《訳語》は実用を第一とする編纂方針によって、保守性を重んじる中国や朝鮮の音韻学やその他の正統な学問が結果的に記録できなかった、現代漢語形成の上で重要な意味を持つ尖団音の混同といった現象を《訳語》ははじめて記録に留めることができたのである。

本稿の指摘によって、尖団音合流の開始時期が少なくとも17世紀後半にまでさかのぼれることとなった。

註

1　司訳院で行われた外国語通訳官養成業務や教科書の編纂事業は「訳学」と呼ばれ、漢学、蒙学、女真学（清学）、倭学の4言語が対象とされたことから「訳学」はまた「四学」とも呼ばれた。

2　《倭語》は《通文館志》巻7人物条の記録から、洪舜明が対馬藩の儒者で対馬の対朝鮮外交に尽力した雨森芳洲の協力を得て編纂したとされている。鄭光1978では《倭語》の刊行年について、《通文館志》洪舜明条の記録から康熙辛巳（1701）から己丑（1709）まで洪舜明が釜山の倭館と関係があり、丁度この時期に雨森芳洲が対馬藩から倭館に派遣され駐在していた時期と一致することから、《倭語》の編纂、刊行年を《訳語》と《同文》刊行の間の17世紀末から18世紀はじめであると推定されている。

3　李朝時代は両班、中人、奴婢の3段階に身分が別れていた。通訳官はほとんどが中人階級に属していた者たちであった。

4　文臣の年少者から選抜されて漢語を司訳院で学んだ者

5　科挙の文科及第後、選抜されて漢語を学び、その後中国へ赴いて訳学教科書に記載されている漢語や漢語の実際の発音について質正する任務を担当した者

6　林東錫1982によれば、「司訳院の職制には「内職」「外任」「遞児職」の3種があり、「内職」は王都漢城府の司訳院の職員。「外任」とは国境地帯或いは外国使臣往来の要路にあって、接待や道案内を担当した訳官。「遞児職」は離職中の訳官である。」としている。このうちの「外任」は司訳院の地方出先機関に所属した訳官で、これを地方訳学といった。地方には訳学訓導、訳学兼軍官が配置され、同じく林東錫1982では地方でも四学それぞれに訳学生徒を募り、外国語教育を行っていた。

7　鄭光1990によれば、臨文は本を見ないで漢語で読み、その意味を解釈する試験法としている。臨講ともいった。

8　上掲鄭光1990では本を見ずに漢語で読み、解釈する試験法。

9　臨文に同じ。

10　出題書の該当部分を暗記し、該当言語の文字で書く試験法。（上掲鄭光1990）

11　《四声通解》1517年刊

12　《老乞大》《朴通事》ともに成立年不明であるが、《老乞大》については近年、韓国で高麗刊本（中国では元代末）が発見された。両書はともに司訳院において漢語学習書として李朝時代全般にわたって使われ続けた会話教科書である。そのため、幾度か漢語部分に改訂が行われ、中国の元末から明、清代にかけての漢語語彙、語法、音韻の変遷を知る上できわめて資料価値の高いものとなっている。

13　( ) 内は上は上巻、下は下巻を、「」内はその語彙が分類されている項目名を、続く数字は本稿で参照した亜細亜文化社から影印刊行された影印本のページ数と行数である。

14　ハングルで転写された漢語音については〔〕内にI. P. Aによって注音する。また、現代漢語の標準音を示す場合には () 内に漢語ピンイン法案を記す。参照した辞書や引用論文中の発音転写はそのまま使用した。

15　拙稿1989では清末の小説《児女英雄伝》において、会話文と地の文では「牲口」が使用されているが、山東出身の馬引きの台詞にだけ「頭口」が使用されていることを指摘した。

16　《老乞大》《朴通事》は「李朝500年」とも言われる長い間、一貫して漢語教科書として使用されてきたために、中国での漢語の変化にともなって内容はそのままで、語彙、語法、音韻についての改訂が幾度か行われた。漢語部分の主な改訂は高麗末刊行の「元刊本老乞大」(《朴通事》は元刊本が未発見。)から崔世珍が明代になって改訂した《翻訳老乞大》《翻訳朴通事》清代改訂の《老乞大新釈》《朴通事新釈》と3回の改訂が行われた。《翻訳老乞大》《翻訳朴通事》から《老乞大新釈》《朴通事新釈》への改訂は漢語部分について特に大幅な改訂が行われたため、《翻訳老乞大》《翻訳朴通事》から《老乞大新釈》《朴通事新釈》刊行までの各改訂本を「前期」、《老乞大新釈》《朴通事新釈》以降の改定本を「後期」とする。

17　方位詞「～巴剌」は筆者の調査の限りでは中国の白話資料には未検出で、司訳院資料でも《訳語》《同文》《蒙語》のみに見られる。考察の通り北方方言の「邊兒拉」〔parla〕を「巴剌」と表記したものであることは明らかであるが、そもそも「邊兒拉」自体が文字化されたこともない、「土語」的なことばであるから、恐らくは通訳官が耳にしたことばをそのまま文字化したものであると思われる。

18　中国東北地区は清代に「封禁」されていたため、漢民族や朝鮮民族は19世紀に東北の封禁が解けるまで原則として居住していなかった。ここでは封禁地帯以外の中国東北部と言う意味で「南部」とした。

参考文献

《漢語方言大辞典》復旦大学・京都外国語大学編　中華書局　1999
《普通話基礎方言基本語彙》陳章太・李行健編　語文出版社　1996
《漢語方音字匯》第2版　北京大学中国語言文学系編　文字改革出版社　1989
《元語言詞典》李崇興　黄樹先編　上海教育出版社　1998
《北京方言詞典》陳康編　商務印書館　1985
《漢語方言詞匯》第2版　北京大学中国語言文学系編　文字改革出版社　1995
《17世紀国語辞典》韓国精神文化研究院編　太学社　1995
《老乞大朴通事研究》梁伍鎮　太学社　1998
《司訳院訳学書冊板研究》鄭光　1998
《洪武正音訳訓研究》金武林　月印　1999
《清語老乞大新釈》鄭光　太学社　1998
《朝鮮訳科試券研究》鄭光　成均館大学校大東文化研究院　1990
《漢語史》王伝徳　尚慶栓　斉南出版社　1996
《明清官話音系》葉宝奎　厦門大学出版社　2001
《朝鮮訳学考》林東錫　国立台湾大学国文研究所博士論文　1983
《利津方言志》楊秋沢　語文出版社　1990
《山東省志・方言志》山東省地方志編纂委員会　山東人民出版社　1993
《白話語彙の研究》香坂順一　光生館　1983
《李朝時代の訳学政策と訳学者》姜信沆　塔出版社　1978
小沢重男　中韓蒙対訳語彙集「蒙語類解」の研究（1）「東京外国語大学論集」8　1961
鄭光　類解類訳学書について「国語学」7　国語学会　太学社　1978
金基石　尖団音問題与朝鮮文献的対音「中国語文」2001年第2期　2001年

李得春　近代朝鮮文献中的漢朝対音転写問題「民族語文」　2001 年 2 期
拙稿　《訳語類解》中に「上仝」と記された語彙について　「外国語学会誌」18　大東文化大学外国語学会　1989
《通文館志》金指南編　正音社　1982
《小児論・同文類解・八歳児・三訳総解》延禧大学校東方学研究所　1956
《訳語類解》亜細亜文化社　1974
《蒙語類解》ソウル大学校出版部　1971
《朝鮮王朝実録》国史編纂委員会　1986